魔笛が聴こえる

西村寿行

NISHIMURA
HARD-ROMAN SERIE

NISHIMURA HARD-ROMAN SERIES

魔笛が聴こえる　西村寿行選集19

著　者　西村寿行　©1978
発行者　徳間康快
発行所　徳間書店　東京都港区新橋四―一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二
カバー装幀　矢島高光　装画　横山　明　本文挿画　小松久子

昭和53.9.30　初刷
54.4.1　7刷
¥650

魔笛が聴こえる

西村寿行

NISHIMURA
HARD-ROMAN SERIES

西村寿行選集 19　650円

IIMURA HARD-ROMAMAN SE

著者近影　photo＝若菜　東

御霊町は鳥取と岡山の県境近くの鳥取側にあった。県境の人形峠に、ウラン鉱石を採掘する原子力燃料公社がある。
町の中央を貫流する竹田川を境にして、町は南北にわかれ、南地区には町を拓いた旧住民が、北地区には新興勢力が住みついていた。
――八月二十日、南地区の自治委員長野川禎二のひとり娘で六歳になるひろ子が川に落ちて死んだ。
事故か殺人か不明であった。だが、この事件が数年前からくすぶっていた南地区と北地区、新旧の住民の対立感情に火をつけた。
人口一万たらずの小都市・御霊町は、この日を境に、魔笛におどらされるように、憎悪の炎が燃えあがったのだった……。
鬼才が新境地を拓くパニック・ノベル巨篇。

0293-151604-5229

IIMURA
HARD-ROMAN SERIES

19

魔笛が聴こえる

西村寿行

徳間書店

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

目次

第一章　少女の死……7
第二章　少年の死……39
第三章　女敵討……66
第四章　地崩れ……94
第五章　焼き打ち……124
第六章　四人の男……152
第七章　遠吠え……183
第八章　お妙の霊……212
第九章　男……246

第一章　少女の死

1

御霊町は鳥取県と岡山県境近くの鳥取側にあった。県境に人形峠がある。

昔、美作と伯耆を分ける国境の峰々にはさまざまな邪悪なけものたちが棲息していた。

人形峠には土蜘蛛がいた。その土蜘蛛は美しい娘に化けるのを得意とした。旅人が通りかかるとどこからともなしに美しい娘が三味線を抱いてあらわれる。娘は、弾いて聴かせてほしいと、三味線を旅人に渡す。旅人は芒の原で三味線を弾く。風がそよいでいる。旅人はふと妖しい気配に気づく。みると、いつの間にか、三味線の弦が蜘蛛の糸になって、両腕を絡めとっている。美しい娘はたちまち大土蜘蛛になって旅人を貪り喰うのである。

因幡の国に豪胆の武士がいた。武士は美男人形を峠に立てて、待った。土蜘蛛は人形とも知らずに糸を吐きかけて絡みついた。そこを、武士はおめきながら斬りかかって、一刀両断にした。

人形仙という地名になった。

現在の人形峠はその人形仙の近くである。人形峠と命名したのは、人形峠一帯でウラン鉱石を採掘する原子力燃料公社であった。

人形峠は竹田川の源流でもある。竹田川は御霊町を貫流し、倉吉市を抜けて日本海に注ぐ。その竹田川沿

いに国道179号線が走っていた。
御霊町は町の中央を竹田川と国道179号線につらぬかれていた。
野川禎二は竹田川の南岸にある南郷に住んでいた。
八月二十日。
野川禎二は果樹園に出ていた。果樹園は北岸の神室山山麓に拡がっている。なだらかな斜面であった。御霊町の経済を支えている二十世紀梨園がある。たいていの農家がそこに梨園を持っていた。
二十世紀は今年、まれにみる豊作であった。どの梨の木にも粒の揃った一級品がたわわに実っている。
野川禎二は、作業の手を休めて豊作ぶりを眺めていた。収穫はあと一カ月に迫っていた。
だれかが、陽炎のかすかに燃えるゆるい傾斜地を駆け登ってくるのがみえた。その登りかたがすこしばかり異様であった。何かが起こって、だれかに報せに急いでいる気配が感じられた。
「野川さーん」
その男が遠くから呼ぶのをきいて、野川は、急に陽の翳るような不安をおぼえた。別に不安をおぼえねばならない材料があるわけではなかった。その男の登りかた、呼びかけた声に含まれた緊迫感——そうしたものが、陽炎の中に、ふっと、ゆらめいた。
野川は小走りに走った。
「ひろ子ちゃんが……」
男は近所に住む時宗栄夫であった。
息せききっていた。
「……」
野川は棒立ちになった。一人娘のひろ子のただならぬ異変を時宗が告げたことは、訊くまでもなかった。
「どうした！」
野川は噛みつきそうに訊いた。
「運河に、落ちて……」
時宗は灼けつく喉から、ひび割れた声をだした。
野川禎二は走った。その後を時宗栄夫が追った。残

暑が生ぬるい風をはためかせた。
野川と時宗が小型貨物車で駆け戻ったときには、野川の家は多勢のひとびとで取り囲まれていた。
人垣を分けて野川はわが家に入った。
妻のよし子が、娘の遺体に取りすがって号泣を放っていた。その周りにもひとびとが取り巻いていた。
野川は立ち竦んだ。娘の顔には白布がかぶせてあった。野川は血の気をなくしてしまっていた。よろめくように膝を折って、白布を取った。ひろ子だった。草の葉を思わせる青い貌になっていた。歯を喰いしばっている。苦しさがそのまま表情に残っていた。小さな鬼のようにみえた。
「ひろ子！」
野川は死体を搔き抱いた。悪寒が風のように体中の血管という血管を走っていた。脳にはほのおが燃えあがっていた。
野川の狂乱を、ひとびとは見守った。
野川はひろ子を搔き抱いてやにわに家を走り出ようとした。医者だ！　医者へと、野川はわめいた。だれかが、医者は死亡を確認して帰ったばかりだと、押しとどめた。野川はそれをきいて、ひろ子を畳に寝かせ、人工呼吸をはじめた。小さな腕を振り動かし、胸を押え、口から息を吹き込んだ。なんども、なんども、野川は息を吹き込みつづけた。
ひろ子の遺体の肺が音をたてた。そのたびに胸が動いた。それが野川をさらに狂乱状態にした。生きている！　生きている！　野川はわめいた。ひとびとには野川の吹き込む呼気で肺が音をたて、動いているのだと、わかっていた。死体で発見されてから約三十分が過ぎていた。息を吹き返すことはない。
小一時間もそうしていて、野川は、やっと、ひろ子から離れた。幽鬼のような表情になっていた。
警察がやってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

2

御霊町幹部派出所。

所長は神島警部であった。警官が総勢で三十人近く配属されている。一応、警察署と同じ態勢を布いていた。捜査課、交通課、警務課、防犯課がある。捜査課の刑事は三人であった。

神島警部は、野川ひろ子を事故死だと最初から断定した。町営の御霊病院院長、右本昇平の検死結果がそう出ていた。

野川ひろ子は六歳であった。野川家のある竹田川南岸の南郷・掘金両地区は中央を掘割りが通っていた。竹田川から水を引いている。〈運河〉と呼ばれていた。昔はその運河で洗濯などをしたものだが、いまは岸が嵩上げされて、運河には下りられなくなっていた。

野川ひろ子はその運河に沈んでいた。子供たちが発見して、おとなに報せた。おとなたちは引き上げる一方、御霊病院に急報した。右本院長が駆けつけた。死後一、二時間であろうとの検死結果が出た。午後の二時である。

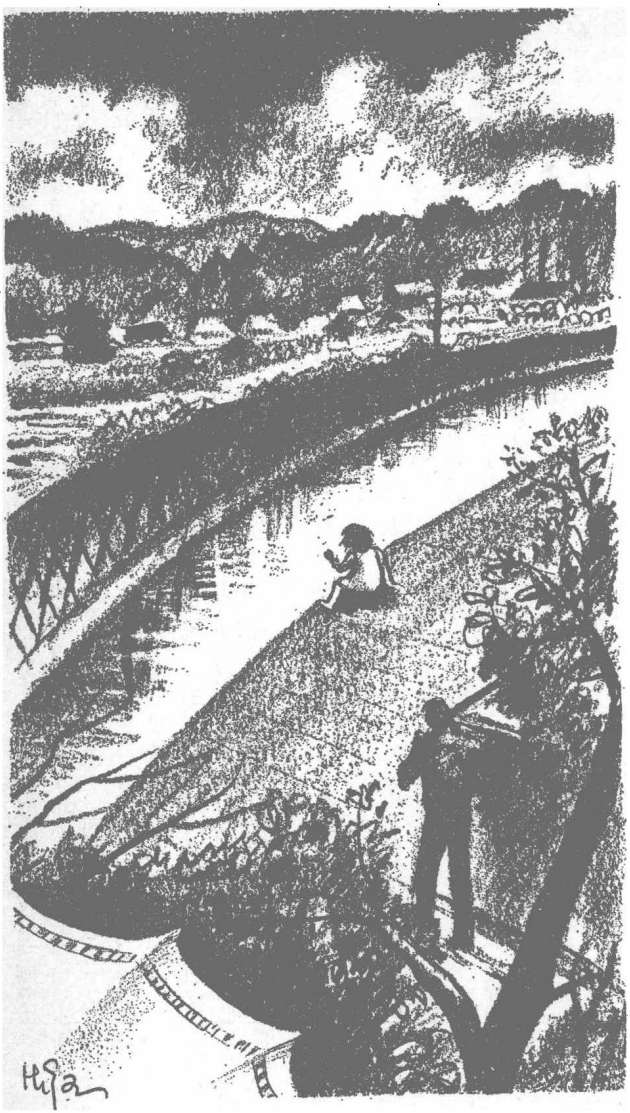
運河には防壁も柵もない。野川ひろ子は誤って落ち、溺死したものとみられた。検死結果からみて、落ちたのは昼前後であろう。その頃は人通りがすくない。不運だといえる。

解剖はしないことに決めた。司法解剖なり行政解剖なりするのがふつうだが、野川禎二が反対した。一人娘のいたいけな死体を切り刻むことには耐えられない。そういわれてみれば、あえて法律を持ち出すこともなかった。

神島警部は三人の刑事に捜査を命じた。事件を処理するためである。目撃者がなかったのかどうか。落ちる前に野川ひろ子はだれと、どこで遊んでいたのか。そうしたことを調べさせた。

三人の刑事は歩き回った。

その結果、ちょっと妙なことがわかった。野川ひろ



11　第一章　少女の死

子は午前十一時ごろまで近所の子供三人と遊んでいた。それから足跡が絶えていた。野川ひろ子の母親であるよし子は、町外れにある、町が誘致したトランジスタ組立工場にパート・タイマーとして勤めていた。九時から四時までである。近くだから、昼食は食べに戻る。ほとんどの者がそうしていた。よし子は十二時十分に自転車で家に戻ったが、ひろ子がいない。食事の支度をして捜し回ったが、姿がなかった。そういうことは、たまにだが、ないわけではない。他家でご馳走になることもある。別に気にするほどではないと、工場に戻った。

午前十一時から、運河に落ちただろう昼頃まで、幼い野川ひろ子はどこで、だれと遊んでいたのか。

妙なというのは、しかし、そのことではなかった。神島警部は不明の足取りに重点をおいたわけではなかった。子供はときにブラブラ歩きをするものである。

神島が聴き耳をたてたのは、母親のよし子のことであった。野川よし子は三十歳。勝ち気で、わりととととのった貌をしていた。野川禎二は三十三歳であった。よし子はトランジスタ組立工場技術主任の原田洋一とできているという噂を、刑事が拾って戻った。原田は三十四歳であった。倉吉市に家があり、妻子がいた。通勤してきている。

工場の一泊慰安旅行があって、その晩の夜半過ぎによし子が原田の別部屋に入ったのを、同僚が目撃した。二時間ほどたって、よし子は何喰わぬ顔で寝床に戻った。

噂を野川禎二が知った。よし子は顔を殴られ、一週間ほど家を出られなかったという。それ以来、離婚話がたえなかった。持ち出すのはよし子のほうであった。ひろ子を連れて出て行くという。よし子は原田との関係を、もう隠さなかった。工場が終わってから、工場の宿直室に原田を訪ねることもあった。夫婦の仲は冷え切っていた。かろうじて、一人娘のひろ子が破綻をつなぎとめている現状だというのだった。

神島は腕を組んで考えた。

野川禎二が妻への面当てに子供を殺したのではないか？

そう思ったのは、八月二十三日であった。すでに遺体は荼毘に付されていた。

三人の刑事の意見を訊いた。

嫉妬に狂えばわが子でも殺しかねない――それが三人の意見であった。妻が原田に抱かれてあられもなくもだえる場面を日夜、妄想するうちには、狂気は深まる。殺意が出る。殺意は間接的なものに向かう場合が多い。妻の子供、妻が連れて出て行くとまでいう大切な子供を殺せば、もっとも強烈な報復になる。妻を殺すよりは、生かしておいて苦しませるのが報復としては理にかなっている。あるいは、妻の実家に放火するとか、ともかく嫉妬に狂った男のやることは常識の埒外にあるものである。

四人の意見は一致した。

神島は、野川禎二を呼んで、訊問した。

神島は最初、長々と悔やみを述べた。そのあとで、さりげなく訊いた。

「ところで、あなた、あの日は何時頃に果樹園に行きました」

神島は笑顔を絶やさなかった。

「朝からです。九時前からです。それが、どうかしましたか？」

野川禎二は、不審そうに神島の赭ら顔をみた。神島は四十なかば。肥満体軀だった。酒好きである。暇さえあれば、酒屋も経営している町長の左川十三郎の家に出入りしていると、風評が立っていた。

「途中で、そのう、帰宅しなかったかね」

「しません。弁当持参ですから」

野川は、そのときはまだ神島の肚はわからなかった。

「あんたが、昼前、つまり十一時頃に帰宅したのを目撃したひとが……」

「ちょっと、あんた――」

野川は、神島を遮った。

「どういうことかね、そのいいぐさは！」

野川は顔色を変えた。一人娘の死を、あろうことかその父親に嫌疑をかけている。それと悟って、野川の体から血が引いた。両手の、握りしめた拳がふるえた。

「まあ、そう昂奮しないで……」

神島は笑顔を消した。

「あんたらは――」

野川は、しばらくことばを切って、声のふるえを鎮めた。

「あんたらは、娘が死んだとわかっても、一時間もの間、ほったらかしていた。だれも駆けつけなかった。どうせ、南郷・掘金地区だからと、バカにしたんだ。わたしには、わかっている。その上、あるまいことか、わたしに嫌疑をかけている。いったい、だれに、警察はたのまれたんだ。町長か！」

野川はほのおのように燃えた。

警察の魂胆は、野川にはたちまち読めた。野川は南郷・掘金地区、つまり竹田川を挾(はさ)む南地区の自治委員長であった。御霊町は竹田川を境にして、北側と南側に拡がっているが、北側の梨生・仏子地区には新興勢力が住みついた。旧い住人はほとんど南側に住居を持っている。

新興勢力側に圧倒的な財力があった。町役場、農協、警察、消防団、銀行、郵便局、小・中学校、病院、体育館――そうした公共施設はほとんど北側が押えていた。立地場所もすべて北地区内にある。

民間産業として、町が誘致した三つの工場だけは南地区にあった。だが、これも町長側の勢力内に組み込まれていた。その他に人形峠に近い国道179号線沿いに御霊温泉がある。放射能(ラドン)泉で、リューマチ、神経痛に効くといわれていた。旅館は七軒あるが、そのうちの三軒は町長の左川十三郎が経営し、残る四軒を町議会議長と町教育長、それに大地主の町田鉄造父子がそれぞれ経営していた。

町長はガソリンスタンドも経営している。教育長はスーパーマーケット。

こと数年、ことごとに軋轢(あつれき)があった。おととし、野

川禎二は南地区の自治委員長に担がれていた。町当局とのパイプ役である。放っておけば、南地区はさびれる一方になる。御霊町の人口は九千人強ある。北地区には六千人強が住み、南地区には三千人足らずだった。六千人全部が町長派だというのではない。どちらつかずの新興住民が多い。倉吉市などに勤めているサラリーマンだ。だが、選挙にはかならず町長派に投票する。

自治会が必要になるわけだった。

最近の軋轢は〈運河〉に防護柵を設けることにあった。野川は強硬に町当局にかけ合っていた。御霊町の年間予算は約八億である。税金と地方交付税で約四億、あとは国庫補助や起債などでまかなっている。決して裕福な財政というわけではないが、防護柵を設けるくらいはどうということはないはずだった。しかし、町議会は否決した。

野川禎二は町議会に参考人として呼ばれ、はげしく町長一派を攻撃した。町がどうしても南地区を冷遇する気なら、税金の不払い運動を起こし、それが昂じれば御霊町からの独立につながるぞと脅しをかけた。野川は頑固一徹の性格であった。

町長派、つまり北地区勢力にとっては野川禎二は癌細胞的な存在だといえる。その野川を、娘の死を逆にとって滅亡させようとする陰謀に警察が手をかしたものと、野川は思った。

想像すらもできない、侮蔑を含んだ訊問であった。

野川は蒼白になって、神島を睨み据えた。その血の気を失った表情の奥に、野川は、一人娘のひろ子の弔合戦をやってやる肚を決めた。町が防護柵を設けてさえいれば、この悲惨な事故は起こらなかったのだ。それを、野川の娘が死亡したことで、町は死をかけた面当てと、枉げて受けとり、警察に働きかけたのだ。

許しがたい奸計であった。

「警察がたのまれたとは、きき捨てにならん発言だぞ、あんた」

神島は、しかし、それで気が楽になった。

「だったら、なぜ、そんなバカなことを訊くんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong